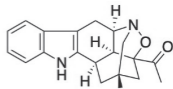


23PO-am005S

ニトロンの分子内付加環化反応を用いた cononuridine の合成研究

○真野 滉大¹, 橋本 善光¹, 森田 延嘉¹, 田村 修¹ (¹昭和薬大)

【目的】 Cononuridine (**1**) は、アポク科の *Tabernaemontana corymbosa* より 2016 年に単離構造決定されたアルカロイドである[J. Nat. Prod. **2016**, *79*, 2709.]. 我々の研究室では、*O*-TBS オキシムを過剰量の $\text{BF}_3 \cdot \text{OEt}_2$ で処理すると、*N*-ボラノニトロンが生じ、これが分子内のアルケンと付加環化反応を起こすことを見出している[J. Org. Chem. **2005**, *70*, 10720.]. 今回、本手法を用いて、これまで合成報告のない化合物 **1** を合成することにした。



Cononuridine (**1**)

【結果】化合物 **6** を用いたモデル反応を検討した。まず、既知の手法に従って、2-iodoaniline (**2**) を出発原料として 2-ヨードインドール **3** を合成した。次いで、Suzuki-Miyamura カップリング反応により 3-シクロヘキセンインドール **5** を合成したのち、鍵中間体となるオキシム **6** を合成した。オキシム **6** の付加環化反応による、

モデル化合物 **7** の合成について検討した。以上の詳細について報告する。

